
キミは太陽

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミは太陽

【Nコード】

N8607Z

【作者名】

karinko

【あらすじ】

東京から転校してきた内気な少女、菜ノ花。いつも笑顔で、かなりの天然な少年、光。しっかり者で少しきついが素直な少女、恵美。いつも冷静だが、優しい少年、悠人。

4人の高校生活を描いた青春物語。

話数は全体に対応しています！（意味分かりませんね）

つまり、たとえば菜ノ花 s i d e の 2 話と光 s i d e の 2 話では同じ日の出来事をそれぞれの目線から、のような。
わかりにくいと思いますがよろしくおねがいします) # ^ . ^ # (

プロローグ 菜の花 side

10月の終わりごろ。

少しずつ冬の足音が聞こえてくるような、そんな季節。

太陽みたいに明るい、キミに出会った。

私は笹川菜の花。

一週間ほど前、とある事情で東京の高校から大阪の高校に編入してきた。

…入学して一週間がたつのに、まだ友達がない。

というのも、（自分で言うのも悲しくなるけど…）私がすごく人見知りが激しくて、内気なことが原因だ。

今は下校時刻。

「はあ…」

私は小さくため息をつく。と玄関をでた。

ふと、ガラスに映った自分の姿を眺める。

そこにあるのは、メガネをかけた地味で暗そうな女子生徒。

更に深くため息をつく。

私はうつむいて、とぼとぼと歩き始めた。

ちょうど運動場の前を通り過ぎようとした時。

ドンッ！

何かに押されて、体が後ろに傾いた。

突然のことだったので支える間もなく、地面に尻もちをつく。

何が起こったんだろう?? そう思って顔をあげると、

「じゅめん!! いける!?!」

男の子が、心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

どうやらこの男の子とぶつかってしまったらしい。

…あれ?? 見たことがある顔。

「いえ、こちらこそすいません…」

私はそう言いながら男の子の顔をあらためて見た。

明るい栗色の髪。

大きな猫目。

服装から男の子と判断したけど、女の子だと思えばそう見えないこともないような中性的な顔立ち。

入学してから一週間の記憶をたどってみる。

…ああ、そつだ。

この子とはたしか、同じクラスだ。

緊張のせいで、クラスのメンバーをよくみていなかったからおぼろげにしか思いだせないけど、たしかそつだつた気がする。

「良かった！んじゃ！」

男の子は私に背を向けて、運動場に向かった。

私も制服についた砂を軽く払い、校門の方に向き直る。

「…あれ??」

ころころ…

目の前にサッカーボールが転がっていた。

これ…さつきはなかったような…

そつとそれを拾い上げる。

もしかしてさっきの子が落としていったんじゃ…！

私は慌てて運動場の方に向き直り、なんとか声が届きそうな距離にいた男の子の背中に向かって声をかけた。

「あのっ…！」

精一杯声をだしたつもりだが、いまいち大きな声は出なかった。

それでもなんとか男の子には届いたようだ。

彼は足を止めてこちらを振り返った。

「ん？オレ？？」

きょとんとして自分を人差し指でさしながら首をかしげる。

「これ…違いますか…??？」

私はおずおずと男の子にボールを差し出した。

ぱつと男の子の顔が明るくなる。

「そう！なんか手がさみしいと思ったら、落としてたんか…！」

男の子はこっちにかけてよってきて私の手からボールを受け取った。

そして、

「ありがとう!」

私にむかって、にっこりと笑った。

驚いて目を見張る。

それは私の16年間の人生の中ではじめてみた、眩しいほどに明るい、太陽みたいな笑顔だった。

プロローグ 菜ノ花side（後書き）

前投稿からだいぶあきました…

ので、新しい連載を始めます！

文章力もなく、へたな物語ですが、読んでいただけたらうれしいです

1話 出会い 菜ノ花 side

「あっ！昨日の子や！！」

教室に入るなり、昨日の男の子が少し驚いたように言った。

いきなりのことですべてどうしていいかわからず、とりあえず小さく頭を下げる。

私が席につくと、彼は私の机に手をついてにっこりと笑いながら話かけてきた。

「同じクラスやってんなあ！全然知らなかった！！てか、転校生！？」

「は、はい…一応…」

「やっぱり！！じゃあ今日転校してきたばっかやな！大変やと思うけど頑張りや！」

「えっと…」

彼は全く悪気のない無垢な笑顔を私に向けている。

一応転校してきたのは2週間前なのだが…

まあ、こんなに地味で目立たない女の子なんて、いくら転校生でも覚えていなくて当然か。

バシッ！

私が頭の中で納得していると、突然女の子が彼の背中を叩いた。

「おまえは何失礼なこといってんねん！この子は2週間前に転校してきた笹川さんやる！！」

男の子は背中をさすりながら首をかしげた。

「え??そうやっけ??」

女の子はため息をつくとき、私に向かって笑いかけた。

「ごめんなあ。こいつがえらい失礼して。」

金髪にツイントールで、女の私でも思わずどきっとしてしまつようなすごく大人っぽくて美人な女の子。

「い、いえ…そんな…」

私が首を振ると、女の子は笑いながら手を横に振った。

「そんな緊張せんでもええで！あっ！ウチ、三浦恵美！遅くなったけどよろしく！！んで、ついでにこのアホは西崎光や！一応覚えといたって！！」

早口で話されたので驚きながらも女の子がしてくれた自己紹介を整理する。

「え、えつと…三浦さん、と西崎くんですね。」

私は女の子と男の子を順番に見て確認した。

「そんな名字にさん付けなんかせんでええって！恵美でええよ！」

女の子…三浦さんは笑ってそう言ってくれた。

「じゃあ…恵美…ちゃん??」

他の女の子を下の名前で呼んだのはいつぶりだろう??

緊張して、少し声が小さくなる。

「んっ！それでええよ!!」

三浦さん…いや、恵美ちゃんは満足そうにつなずいてくれた。

「えー！じゃあオレも名前で呼んでやあ！」

突然西崎くんが割って入ってきた。

いや、女の子を下の名前で呼ぶのも緊張するのに…男の子はちょっと…

「ええと…」

私が苦笑いで首をかしげていると、恵美ちゃんは西崎くんの肩をこづいた。

「笹川さんの自己紹介のとき爆睡してたやつにそんなふうに呼んでもらえる資格があると思ってるんかおまえは!!」

「思う!」

「そうやな、おまえやったら思うな。聞いたウチがアホやった。」

「あつ!そういえばオレ、そんなとき夢の中でサッカーのシュート決めてたで!」

「何をどや顔しとんねん!どうでもええわ!」

2人が言い争いを始めたのをみて、私は思わずくすりと笑った。

なんだろう???

これは関西特有なのかな??

なんだかテレビの漫才を見ているみたい。

突然2人の言い争いが止まった。

あれ?

笑ってはいけない雰囲気だったのだろうか??

私は慌ててぺこりと頭を下げた。

「い、ごめんなさい!笑ってしまっ!」

「名前…」

私の謝罪に返事もせず、西崎くんがぼそっとつぶやいた。

「名前！…なんやっけ？？」

突然明るい声で尋ねられて、私は戸惑いながら答えた。

「さ、笹川菜ノ花ですけど…」

「んじゃ菜ノ花！！」

いきなり下の名前を呼び捨てで呼ばれた。

西崎くんにとっては普通なのかもしれないが、思わずどきっとしてしまっ。

「よろしくな！！」

私はまた、西崎くんの顔に、

あの笑顔を見た。

1話 出会い 菜ノ花side (後書き)

タイトルは「出会い」にしましたが、光と菜ノ花はプロローグに
応出会ってますね(; _ ;)

まあ、今回は恵美との出会いと光とのあらためての出会いという
とで(*^_^*)

2話 部活 菜ノ花side

あの日から恵美ちゃんや西崎くんが頻繁に私に話しかけてくれるようになった。

私も初めは緊張していたけど、少しずつ2人との会話に慣れるようになってきた。

そんなある日……

「菜ノ花は部活とかやれへんのー??」

突然恵美ちゃんに尋ねられた。

「部活…ですか??」

今まで部活には入ったことがない。

一応興味はあつたりするのだが…

なんとなく自分が入ってはいけない世界のような気がしていた。

「特に…考えてはいませんが…」

でも…

「…少し、興味はあります」

私はうつむきながら小さな声で答えた。

恵美ちゃんはそんな私をみてにつこりと笑う。

「じゃあ、今日の放課後一緒に運動場きてくれへん?? 紹介したい部活があるねん!!」

放課後、恵美ちゃんに連れられて私は運動場へ向かった。

「えっと…何の部活ですか??」

「あれ!!」

恵美ちゃんは元気よく運動場の真ん中の方を指差した。

そこでは何人かの生徒がふた組に分かれてボールを追いかけている。

あれは…

「サッカー部…ですか??」

「うん! まあ選手じゃなくてマネージャーの方やけど!!」

マネージャー!!

予想外の言葉が頭の中で大きく響いた。

「マ、マネージャーって…あの、暗黙の了解で美人しかねないという…有名な、あのマネージャーですか??」

「いや、そんな大げさなんとちゃうよ!！」

け、けど…

私のイメージではそうとしか…

とても私のような地味な人間がなれるようなものではない気がします…

私が当惑していると、恵美ちゃんは手を横にふって笑った。

「そんな困った顔せんでも!別にやりたくなかったらやらんでもええし!ただ、サッカー部のマネージャーがウチしかおらんくて仕事が大変やから手伝ってほしいなって思っただけやで!」

「え!!恵美ちゃんしかいないんですか!?!」

サッカー部のマネージャーといえば、結構な人気職だったような気が…(以前の学校調べ)

「いや、募集者はいっぱいおるんやけど…みんな光と悠人目当てでやる気ないやつが多いというか…」

恵美ちゃんはため息をついた。

西崎くん??

ああ、そうだった。

そういえば初めて西崎くんと出会ったとき、彼はサッカーボールを持っていた。

そうか、西崎くんもサッカー部なんだ。

「西崎くんって女の子に人気があるんですか??」

なんとなく私が尋ねると、恵美ちゃんは苦笑いした。

「んー…まあ、あいつは誰にでも愛想ふりまいとるからなあ…。それに…」

恵美ちゃんはふとグラウンドの方に目を移した。

つられて私もグラウンドへと目を移す。

「あいつ、サッカーめっちゃ上手やから」

恵美ちゃんに言われて、私は西崎くんに焦点を合わせた。

ちょうど西崎くんがボールを持っているところだ。

前には4、5人の相手チーム。

西崎くんはボールを止めてじっと前をみると、突然動きだした。

そして軽々と相手役の選手をぬいて、シュートを決める。

「…すげー」

サッカーのことは全然わからないけど、なんとなくそう思った。

まわりの人が西崎くんのまわりに集まって、西崎くんをこずいたり背中を叩いたりする。

西崎くんはその中心でいつものように明るく笑っていた。

「まあ、あんな感じじゃから、かつこいいとか思う女の子が多いみたいやなあ」

「そうなんですか…」

私が感心しながらあらためて西崎くんを眺めていると、ふとこちらをみた彼と目が合った。

「菜ノ花や!」

西崎くんは運動場の端にいた私たちにも聞こえる程の大きな声で私の名前を呼ぶとこちらにかけよってきた。

「どうしたん!??なんでおんのー??」

「ウチが誘ってん!菜ノ花にマネージャーせーへんか?」

「マネージャー!」

西崎くんは目を輝かせると、私の手を握った。

「!」

思わずどきつとする。

けど西崎くんは全然気にしていないようだ。

「やる！オレ、菜ノ花にマネージャーやって欲しい！」

「…えっ」

私は驚いて目を見張った。

今まで部活に入るのはずっと気が引けていた。

ましてやマネージャーになるなど考えたこともなかった。

『なんでこんなやつが入ってるんだらう？』

他の人にそう思われるのが怖くて。

でも西崎くんは私が部活に入るのを望んでくれている。

うれしくて、自然とほおがゆるんだ。

「…はい！」

西崎くんがにっこりと笑う。

「やった！んじゃ、さらによろしくやな！」

「ウチもめっちゃうれしいわ！菜ノ花やったら真面目にしてくれると思うしウチも楽に…」恵美！「！」

突然恵美ちゃんという言葉が低い声が遮った。

「げっ！悠人！」

恵美ちゃん後ろを振り向くと少し顔をしかめた。

「げっ！とはなんやねん！おまえ、マネージャーの仕事ほっぽって何をゆうちょにしゃべっとるんや！」

私も後ろを振り向くと黒髪の男の子が腕組みをして恵美ちゃんを見下ろしていた。

切れ長の目に整った鼻と口。

ずいぶんきれいな男の子だな…。

そう考えて、ふとさつき恵美ちゃんがサッカー部のマネージャー志望の大部分が西崎くんともう一人、

『悠人』という人を目当てにしていると言っていたことを思い出した。

ということとは、この男の子が『悠人』くん？？

「ゆうちょにしゃべっとるわけとちゃうわ！おまえらがウチに無理なことおしつけてくるから、仲間ふやそと思って勧誘してるんや！」

「ん…？？勧誘…？？」

男の子は私の方を見た。

「ちゅーことはおまえがマネージャー希望か??」

「え、えつと…希望というか…」

いきなり見つめられて緊張してしまい、おどおどと答えると、男の子はふいと私から視線を外した。

「まあええわ。とりあえず恵美借りるでー」

そう言つて恵美ちゃんのツインテールの片方をひっぱる。

「ちよ！悠人！離せつて！」

抵抗もむなしく、恵美ちゃんは連れていかれてしまった。

「…ええと、いいんですか??」

私が啞然としながらつぶやくと、西崎くんはにこにここと笑いながら言った。

「…まー、恵美がちゅーにつれていかれんのはいつものことやから」

「そつなんですか!??」

ちゅ…ちゅとくん???でしたよね?

あの男の子はいったいどういう人なんでしょうか…???

キーンコーンカーンコーン…

下校時間を告げるチャイムが鳴った。

「あー、もう帰る時間やな。んじゃあかえろか！」

「えっ！！恵美ちゃんはいいんですか！？それに練習は…」

「ゆーとがきたってことは練習もう終わったってことやし！恵美は…ゆーとがおるから大丈夫やる！」

西崎くんはすつと立ち上がると私に向かって手をふった。

「じゃあ着替えてくるから待っててな！」

「は、はい…」

私はうなずくとぼんやりと西崎くんを見送った。

…つて、あれ??

『待ってて』ってことは『一緒に帰ろう』ってこと…だろうか。

私と…

一緒に帰ってくれるの…???

西崎くんは私のことを『友達』って思ってくれてるのかな??

そう考えるだけでうれしかった。

今までそんなふうに思ってもらえてると思える人があまりいなかったから。

…とりあえず、帰り道ではそそのないようにならなう。

そう誓って軽く右手でガッツポーズを作っていた時。

突然風が吹いて風が舞い上がった。

「っっ!!」

グラウンドの砂が舞い上がって眼鏡の間をぬい目の中に入った。

と、とりあえず洗わなければ…

そう思って私はすぐ近くにあつた水道に向かった。

なんとか砂をとりだして眼鏡をかけようとしたとき、

ざっ…

近くで何かが動く気配がした。

「西崎くん…??」

視界がぼんやりとしていて見えない。

私は眼鏡をかけようとした…だが、いきなり両手をつかまれ、それ

を阻止される。

ぼんやりとした視界の中のすぐ近くに西崎くんの顔が見えた。

じっと私を凝視をしている。

「えっ…??なんですか…??」

突然のことで心臓がどきどきとする。

な、なんだろう??

私の顔に何かついているのだろうか??

西崎くんはしばらく私の顔を凝視したあと、大きくうなずいた。

「うん！」

そしてぱっと明るく笑う。

「菜ノ花は眼鏡とってる方が可愛いなあ!!」

西崎くんの行動を見ていて気付いたことがある。

西崎くんは本当に何も考えずにこういうことを言ったりしたりする。

わかっているのに心臓が強くなった。

「っってことで眼鏡没収や！明日からコンタクトな！」

西崎くんはそういつて私の眼鏡を取り上げた。

…可愛いなんて言われたのは何年ぶりだろう??

突然以前の学校でのこと、中学時代のことを思い出した。

『ブス!』

クラスメイト達が口々に私にそんなふうな言葉を浴びせる。

人をあざけるような、嫌な笑顔。

けど、目の前の少年は純粹な笑顔で私のことを『可愛い』といってくれた。

「…はい!」

今日これから、さっそくコンタクトを買いに行こう。

私はそう誓い、大きくうなずいた。

2話 部活 菜ノ花side (後書き)

サッカーのことはあんまり詳しくないのでおかしな点があれば追及してほしいです(; _ ;)

悠人登場ですよ！でもまだこの時点では菜ノ花は悠人の名前をはっきり知らないということ...(* ^ _ ^ *)

プロローグ 光side

キミの第一印象、

…大好きだったあの子に似てる。

それがきつと、この気持ちの始まりだった。

オレは西崎光!!

サッカーが大好きなスポーツ少年や!笑

今日も楽しく部活に励んでてんけど…

ポーン

ゆーとがミスってボールを勢いよく飛ばしてしまい、ボールがグラウンドの外にでてしまった。

「あ、悪い!光とつてきて!」

「ええよー!!」

オレはすぐにボールの方へかけていきボールを拾った。

そしてグラウンドに戻ろうとしたとき、

ドンッ！

下校中の女の子にぶつかってしまった。

女の子は衝撃で尻もちをつく。

あちゃー！！

やってもーた！！

「ごめん！！いける！？」

オレは慌てて女の子にかけよった。

「いえ、こちらこそすいません…」

女の子は顔をあげた。

この時、初めて（実際には二週間ほど同じクラスで一緒に過ごして
たらしいけど）キミの顔を見た。

肩までの真っ黒な髪。

眼鏡をかけていて、少し地味な女の子。

でも、そのあとオレが忘れてたボールを拾ってわざわざ呼びとめて
までオレに渡してくれたから、きつといい子なんだろうなあと思っ
た。

そんなキミと再会したのが次の日。

キミはあたりまえのように教室に入ってきた。

「あっ！昨日の子や！！」

びっくりして、なんとなくうれしかった。

そのままキミに話しかけて、途中で恵美が入ってきて、なんだかんだでキミの名前が『笹川菜ノ花』だということを知った。

そしてオレと恵美がいつものように言い争いを始めると…

キミ…菜ノ花が笑った。

その笑顔が…

どこことなく、あの子に似ている気がした。

『いい子』そうだから仲良くなろうと思った。

それが、『あの子に似ている』から仲良くなりたいと思った。

菜ノ花への興味がよりいっそう大きくなった。

プロローグ 光side（後書き）

光sideのプロローグです。

はい、あと恵美と悠人の分もあります。

めんどくさいと思いますが、読んでいただけるとうれしいです…

ちなみに今回は『大好きです』『や』『純情恋模様』のように菜ノ花side 光side 恵美side 悠人sideみたいに順番にはならないと思います。

読みにくいと思いますがよろしく願います（*^|^*）

2話 発見 光side

それからオレは頻繁に菜ノ花に話しかけるようになった。

菜ノ花もオレに慣れてきてくれたんか、徐々に普通に話してくれるようになった、そんなある日。

オレは学校が終わるといつものように部活に向かった。

正直学校には部活でサッカーするためにきてる

今日は二手に分かれて試合形式の練習。

オレはこの練習がめっちゃ好き！

他の練習も好きやけど、この練習は少し緊張感を持てる。

オレはこの練習のとき、いつも本物の試合をイメージする。

相手役のチームメイトを他の高校の選手に置き換える。

あいつはどんなふうに動くかな??

どうやったらうまくシュートを決められるかな??

考えるだけでめっちゃ楽しい！

ボールがオレにまわってきた。

じつとゴールを見据える。

目の前には相手役のチームメイト。

直感的に突破口を思いつく。

思いついたらそく行動！

たいていそれは成功する。

今回も例外ではなくボールはうまくゴールに吸い込まれた。

「光！おまえちょっとは手加減しろや！！」

「ほんまおまえおつたら練習ならへんわー」

チームメイトがオレのまわりに集まって口々に文句をいったりこずいたりする。

だけどみんな楽しそうな笑顔。

オレはこの時間が一番好きや。

やっぱり部活は楽しいなあ！！

そう思いながら、何気なくグラウンドの端の方を見た。

そこにはいつものようにマネージャーである恵美が座っている。

…あれ???隣にもう一人おる???

女の子のようだ。

その子もじつとこちらを見ている。

ふとその女の子と目があつた。

あれってもしかして…

「菜ノ花やー！」

菜ノ花が見に来てくれる！

オレはうれしくて菜ノ花の方へかけよつた。

「どうしたん！？なんでおんのー??」

オレが尋ねると、驚いている菜ノ花の代わりに恵美が答えた。

「ウチが誘ってん！菜ノ花にマネージャーせーへんか？って」

「マネージャーー！」

菜ノ花がマネージャーなってくれたら、放課後も休みの日も毎日会える！

なんでかわからへんけど、それがめっちゃうれしいことに思えた。

とりあえず、オレは菜ノ花ともっと仲良くなりたかつたからそう思ったんやと思う。

思わず菜ノ花の手を強く握る。

「やる！オレ、菜ノ花にマネージャーやって欲しい！」

「…えっ」

菜ノ花は驚いたように目を見張った。

しばらくの沈黙のあと、菜ノ花がうれしそうに笑ってうなずいた。

「…はい！」

菜ノ花につられてオレも笑う。

「やった！んじゃ、さらによろしくやな！」

「ウチもめっちゃうれしいわ！菜ノ花やったら真面目にしてくれると思うしウチも楽に…」
「恵美！！！」

突然恵美の声を遮るようにゆうとが後ろから恵美を呼んだ。

「げっ！悠人！」

恵美はゆうとを見て顔をしかめる。

あー。また恵美仕事さぼってたんやなあ。

オレはぼんやりと考えながらゆうとと恵美のやりとりを見ていた。

やがていつものように恵美がゆーとに連行される。

「…ええと、いいんですか??」

菜ノ花が不安そうにオレに尋ねてきた。

ああ、そうか。

菜ノ花はこれに慣れてへんねんなー

「…まー、恵美がゆーとにつれていかれんのはいつものことだから」

「そうなんですか!？」

キーンコーンカーンコーン…

菜ノ花の驚いた声とほぼ同時に下校時刻のチャイムが鳴る。

「あー、もう帰る時間やな。んじゃあかえろか!」

「えっ!!恵美ちゃんはいいんですか!??それに練習は…」

「ゆーとがきたってことは練習もう終わったってことやし!恵美は…ゆーとがおるから大丈夫やろ!」

オレはおろおろとしている菜ノ花を見て少し笑いながら立ち上がった。

「じゃあ着替えてくるから待っててな!」

そういつて菜ノ花に手を振る。

「は、はい…」

菜ノ花がうなずくのを確認して、オレは部室へ急いだ。

「あつ、光！助けて！」

部室には他の部員達がたむろする端で恵美がなぜかホウキを持って床をはいていた。

隣でゆーとが腕組みをしながらそれを見張っている。

「…何してんのー??」

「一応聞いた方がええかな、と思つて尋ねてみるとゆーとが恵美から目を離さずに答えた。

「こいつがいつもさぼるから部室が砂だらけになつとんねん！だから今日という今日は掃除させよ思つてな」

「だからつて今日じゃなくてもええやろー…もう下校時刻やゆーねん…」

「アホか！そんなんいうておまえずつとやらへんやろ！心配せんでもオレがぎりぎりまでみといたるから安心してやれ！」

「うづ…こいつ、解放してくれる気ない…」

「恵美ーどんまいやなー！」

「まー頑張れ！」

まわりにいる部員達がからからと笑いながら恵美をからかう。

「楽しそーやな！」

オレが笑って言うと恵美に睨まれた。

「全然楽しくないわ！」

???

めっちゃたのしそーやけど…

まあええわ！

早く着替えな、菜ノ花が待ってくれてるし！！

オレがいそいそと着替え始めると恵美に怒鳴られた。

「おい！おまえ仮にも女子がおる前で堂々と着替えんな！！」

「えー、だって荷物ここにあるし、いちいち更衣室までいくのめんどうさいやん！」

「だからってなあ！」

恵美が後ろで文句を言っているのを聞きながらオレは素早く着替えをすまし、部室をでた。

急いでグラウンドの方へ戻る。

菜ノ花…ちゃんと待っていてくれてるかな…??

さつき菜ノ花といた場所に帰ると菜ノ花の姿はなかった。

…あれ??

もしかしてもう帰ってもーた…??

一瞬不安になったが、すぐに水道のそばに菜ノ花を見つけて安心する。

「なの…!」

声をかけようとして驚いた。

あれ…??

菜ノ花なんか違う…

眼鏡、とつてる??

菜ノ花はオレに気付いたみたいだ。

「西崎くん…??」

小さな声でオレの名前を呼ぶ。

はつきりと目が見えていないようで菜ノ花は眼鏡をかけようとした。

思わずその手をつかむ。

もっと…

菜ノ花の顔をちゃんとみたい…

「えっ…??なんですか…??」

戸惑う菜ノ花の顔をじっと見る。

長いまつ毛に囲まれた、大きな目。

ずっと縁の大きな眼鏡をかけていたから全然気がつかなかった。

それに、白くて透き通ったきれいな肌。

小さくて可愛い口。

菜ノ花って…めっちゃ可愛いやん…

なんで今まできづかへんかったんやろっ??

ああ、そうか。

いつも真面目そんな眼鏡かけてたから地味やなあっていう印象が強すぎたんやな。

「うん！」

オレは大きくなずいた。

多分菜ノ花がめっちゃ可愛いってことを初めに知ったのはオレや！
なんとなくそれがめっちゃうれしくて、自然と頬が緩んだ。

「菜ノ花は眼鏡とってる方が可愛いなあ！！」

みんなにも見せてあげたいな。

んで、自慢したいな。

オレが最初に気付いてんでー！って。

「ってことで眼鏡没収や！明日からコンタクトな！」

オレは菜ノ花の手から眼鏡をとりあげた。

菜ノ花はしばらく驚いたような表情をしていたが、すぐに大きくなずいた。

「…はい！！」

そして、とろけるように可愛らしく笑った。

なんだか左胸が締め付けられるように痛くなった。

でも嫌じゃない痛み。

…なんやろ??

わからへんけど…

とりあえず、明日が楽しみやなあ。

みんなどんな風な反応するかなあ。

いや、みんなちゃんと菜ノ花のこと知らんから眼鏡つけてるときの
違いとかわからへんかな？

でも恵美はもちろん、ゆうとも今日ちょっと菜ノ花を見たし、分か
つてくれるよな。

楽しみやなあ…

そんなことを考えると楽しくて、オレはまた笑った。

2話 発見 光side (後書き)

光sideってなんとなく書くの難しいです…
何を考えてるのか全然分からないので…

プロローグ 惠美 side

あの子がいなくなってから、

ウチらの日々にはどこか光がなくなってた。

けど、あの子があらわれてくれたから…

ウチらの日々はまた色づき始めた。

初めて女の子を見たのはクラスでの彼女の自己紹介の時。

彼女は東京の高校から転校してきたらしい。

黒くて肩までの髪に縁の大きな眼鏡。

名前は笹川菜ノ花というらしい。

なんか暗そうな子やなあ…

最初はそんなふうに思った。

それから二週間ほどたったある日、光が笹川さんに声をかけているのを見た。

どうやら笹川さんに興味を持ったらしい。

何の気なしに2人の会話を聞いていると、

「同じクラスやってんなあ！全然知らなかった！！てか、転校生！？」

「は、はい…一応…」

「やっぱり！！じゃあ今日転校してきたばっかやな！大変やと思うけど頑張りや！」

笹川さんは困ったような顔をしている。

…あいつはまた失礼なことを。

ウチは大きなため息をついて席を立つと、2人の会話にわって入っていった。

そして光に注意するついでに軽く自分と光の自己紹介をする。

「え、えっと…三浦さん、と西崎くんですね。」

笹川さんはウチと光を交互に見ながら、おずおずと名前を呼んだ。

女子から名字で名前を呼ばれたことがなかったウチはそれがなんとなく気持ち悪かった。

だから、

「そんな名字にさん付けなんかせんでええって！恵美でええよ！」

ウチは笑ってそう言った。

「じゃあ…恵美…ちゃん?？」

笹川さんは少し照れくさそうに、でもうれしそうにウチの名前を呼んだ。

その雰囲気はなんだかとても可愛らしくて、このとき、ウチの笹川さんへの印象は一気に急上昇した。

なんや…

この子、最初は暗そう思ったけど、ええ子そうやん。

そのあと光がいらんことを言ってきたからウチがそれをたしなめ、いつものように言い争いになった。

くすっ

それをみて、ふいに笹川さんが笑った。

ウチと光は驚いて口を閉じる。

笹川さんはウチらの反応を見て慌てて頭をさげた。

「ご、ごめんなさい！笑ってしまっ！」

「名前…」

笹川さんの言葉に返事もせず、光がぼそっとつぶやいた。

「名前！！なんやつけ？？」

ウチは次の光の声を聞いて驚いた。

光は確かにいつも明るい。

だけど…

あの子がいなくなってからこんな声は聞いていなかった。

すごく、明るくてうれしそうな声。

なんとなく、ウチにはその理由が分かった。

だって、ウチも思ったから。

笹川さんの笑顔がどことなく、あの子に似ていると。

プロローグ 恵美side（後書き）

今回の小説はほんと読みにくいな（@|@:）
菜ノ花sideの話を微妙にやってからの光side、恵美side
eで同じ話をもう一回やってる感じ…

次の話からはもうちょっと読みやすい順番にするようにしよう
と思います（:|一一）

3話 勘違い 恵美side

「ウソー！ー！こんな可愛い子がオレらのマネージャーになってくれるん！？」

「え、えっと…笹川菜ノ花です…よろしくお願いします。」

今日から菜ノ花がマネージャーとしてサッカー部に入ることになった。

…というわけで、今は菜ノ花の自己紹介中。

菜ノ花のまわりに部員がわらわらと集まって菜ノ花が困っている。

そんな状態。

ウチは小さなため息をついた。

あつ、ちなみになんで今まで散々地味、地味って表現してきた（めっちゃ菜ノ花に失礼やな…）菜ノ花がこんなに部員に大人気になっているのかというと、菜ノ花が眼鏡をはずしてコンタクトにしていたからだ。

入部とともにいきなりコンタクト。

というのはちよつと男子受け狙ってんかな？…？…と思ったがそうでもないらしい。

理由は今朝菜ノ花と光が説明してくれた。

どうでもいいけど振り返ってみよう……

「恵美！聞いて聞いて！大ニュースや！！！！」

ウチが教室に入るなりいつになくご機嫌な光が満面の笑みでかけよってきた。

な、なんやこいつは…

朝っぱらから元気なやつやなあ……

「なんやねん??」

「秘密！本人きたら教えたる！」

光は『知りたいやろ？まあおあずけや』とばかりの顔でウチを見た。

なんか腹立つなあ。

なんやねん、こいつの変なテンション……

と、ウチが冷たい目で光を睨んでいると、

「あっ！きた！見て見て！」

光がうれしそうに教室の扉の方を指差した。

光が指差した方を見ると、ちょうど菜ノ花が教室に入ってきてようとしていてるところだった。

……あれ？なんかいつもと違うなあ。

疑問に感じて、ふと菜ノ花が眼鏡をかけていないことに気がついた。

「あっ…恵美ちゃん、西崎くん、おはようございます。」

菜ノ花は恥ずかしそうに下を向いた。

そんな菜ノ花を光が引き寄せて、私に見せつける。

「見て！菜ノ花って眼鏡とったらめっちゃ可愛いねん！！」

光に言われてウチは菜ノ花の顔を見た。

思わず目を見張る。

長いまつ毛に大きな目。

今まで気にしてなかったけど、よく見ると可愛い顔立ち。

「ほんまや……」

ウチがつぶやくと、菜ノ花は顔を赤くしてさらにつつむき、光は得意げに鼻を鳴らした。

「オレが最初に発見してん！すごい！？」

「はいはい、すごいネ。で、なんでまた眼鏡とってきたん??」

ウチが尋ねると、菜ノ花はぼそぼそと答えた。

「その……昨日…光くんに眼鏡をとられてですね……」

「うん！オレが眼鏡とって、明日からコンタクトでこい！っていつてん！」

……！?

それはどういうシチュエーションなんや!?

全く理解できん…

……というわけらしい。

いや、最後にウチも『全く理解できん…』って言うてるけど、まあ要は光のせいやっちゅうことで、それを掴めてもらえたらいいと思う。

というわけで、眼鏡をとった菜ノ花はめっちゃ可愛い。

菜ノ花ってめっちゃおいしいやつやなあ…

困まっている菜ノ花を見てそんなことを考えていたとき、

「いやー！恵美は女ちゃうからな！女の子らしい子きてくれてうれ

しいわ!」

部員の一人、愛称『ハゲ』である横山結城の声が聞こえた。

「ほーっ…」

ウチが女じゃない…と。

この完璧な大和撫子ばりの女子である三浦恵美様が女じゃないと…

「おい、ハゲエー!!ウチのどこかどう女の子らしくないっちゅうねん!言うてみー!!」

ウチは結城を怒鳴り飛ばした。

「そこやー!!」

結城の親友である愛称『チャラ男』こと江藤大地がつっこんだ。

それを無視してウチはため息をつく。

「はあ…って、あれ??」

そーいえば、今ここで一番生き生きしてそうな人物が足りへんとい
うか……

「光は……」

ウチがまわりを見渡すと、すぐに部室の床で倒れている光を見つけた。

「おまえは何をしとんねん!？」

「だって…誰もオレの相手してくれへんから……」

光はゆっくりと立ち上がりながらつぶやいた。

「そうか…そういうや恵美には言うてへんかったなあ……」

珍しく深刻そうな光の顔。

「ごめん…もつとはやくいうとくべきやった…。オレな……」

いつもノーテンキな光がこんな深刻に……

もしかして、何かめっちゃ重要なことなんやろか……???

「さびしかったら、死ぬんやで??」

全身の力がぬけて、思わず転びそうになった。

「ウサギか!」

かろつじてそうっつこむ。

あかん…

こいつの言うことをまともに聞いたウチがアホやった……

「だってー!!みんな菜ノ花菜ノ花って!!オレもかまってくれや

「！！！」

「ごめん！光！」

「オレらが悪かった！！！」

光のまわりに集まって肩をたたいたり、慰めたりする部員達。

アホや、こいつら……

ちゅーかみんなを『菜ノ花菜ノ花』にさせたんは誰やっちゅー話やし！

つたく、朝のあの妙なテンションの光はどこへいったんや……

「……楽しい部活なんですな」

隣で菜ノ花がその光景を見ながら微笑んだ。

ウチもそれを見ながらふっと息をつく。

「まあ、いろいろめんどくさいけどな！でも、菜ノ花が気に入ってくれたみたいで良かったわ」

菜ノ花の笑顔を見ながら、ウチはほんまに菜ノ花をこの部活に誘ってよかったなと思った。

「おい！」

そんなにぎやかな雰囲気の中、突然部室のドアが悠人の声とともに

開いた。

「もう練習始まるでー!! 集まれよ!!」

「ほーい」

「やべっ! シューズ忘れた!!」

悠人の声とともに部員達がぞろぞろと練習の準備を始める。

「んっ??」

ふと悠人が菜ノ花の方に視線を向けた。

「そーいや、お前…昨日マネージャーになりたいとかなんとか言ってたやつやんなあ??」

「は、はい! 一応先生にも報告してきました!!」

菜ノ花はびしつと姿勢を正して答える。

そんな菜ノ花を悠人はじーっと見た。

「……なんか昨日と雰囲気ちがうくない??」

「あっ! せやろ!! やっぱ悠人は気付いてくれた!??」

光が突然水を得た魚のように食いつく。

「これにはふかーいわけがあつてな!? 聞きたい!? 聞きたい!??」

「いや、ええわ」

朝と同じ変なテンションの光を軽く流して悠人は菜ノ花に向かって笑いかけた。

「オレはキャプテンの和泉悠人や！よろしくな！！」

悠人が菜ノ花に自己紹介をしているのを見て、やっと菜ノ花がはつきりと悠人の存在を知っていなかったことに気がついた。

あー、そういや昨日悠人がきたときに菜ノ花に紹介しとくべきやったな。

「まあどんなことしたらええかとかは恵美に効聞き。オレは練習参加せなあかんし」

「は、はい！」

悠人はそれだけ言い残すと部屋をでていった。

そのあと、ウチは菜ノ花に軽くマネージャーの仕事を教えてから外でお茶作りを始めた。

「んてなっ！それで光がな！」

ウチが光のおもしろい話を菜ノ花に話していると、菜ノ花がふと思いついたように言った。

「恵美ちゃんって…西崎くんの話してる時、すっごく楽しそうですよねっ！」

「え…??？」

そうか???

まあ、あいつはおもしろいことばっかしよるから、あいつの話するんは楽しいけど……

「もしかして恵美ちゃん……」

菜ノ花がいたずらっぽい目で私を見つめる。

「西崎くんのこと、好きなんですか??？」

……!!

少し驚いて目を見張った。

いや、確かに好きやけど……

光はそーいう好きじゃなくて……

というか、どちらかというとうちは……

かあああ！

顔が急激に熱くなった。

それを見て菜ノ花はにやにやと笑う。

「やっぱりそうなんですネ!!」

「いや、違…!!」

今のは光のことを考えて赤くなっただんとちゃうくて!!

ウチが言いわけしようにも、ウチが光のことを好きと思いこんだ菜ノ花には通用しないようだ。

「大丈夫ですよ!西崎さんと恵美ちゃんならすっごくおにあいです!私、応援してますから!」

「いや、ほんまにちが「えっ!」?」

ウチの無駄な反論はうしろからの違う声にかき消された。

「そっ…やったん…??」

この声、もしかして……

ウチはゆっくりと後ろを見た。

「…悠人!!」

やっぱり。

こいつには一番勘違いされなくなかったのに……

「いや、聞くつもりはなかったんだけど…聞いてもーたわ」

悠人は申し訳なさそうに頭をかく。

「いや！違うねん！これは菜ノ花が勝手に！」

「いやいや、大丈夫。恥ずかしがらんでも、オレもおまえは光が好きなんちゃうかと思ってた」

だから違うっちゆうねん！

ほんまこいつだけはタイミングが悪いやつやな…！

ウチが反論しようとして口を開きかけた時。

ポンッ

悠人がウチの頭を手をおいた。

「頑張れよっ！！」

そしてウチに向かってにっとならう。

「応援してるで！」

不覚にも、その笑顔がかっこいいと思ってしまった自分に腹が立たた。

おそらく赤くなっているだろう顔を隠すようにうつむく。

「……………」
「ありがとう」

「あーっ！！やっと1日終わったーっ！！」

「おまえ今日、ほとんど何もやっくらんかったやろ……………」

下校時刻。

ウチと光と悠人は帰路についていた。

「ウチもちゃんといろいろやってみましたー！」

「ウソつけっ！全部あの子に押し付けてたんしってんねんぞー！！」

「うっ！！な、なぜそれを……………！！」

ウチと悠人が話していると、突然光が足を止めた。

「……………」
「あれ??」

そして慌てたように振り返る。

「菜ノ花は??菜ノ花はどこ行ったん??」

「え…なんか残って部室のそうじやるって言ってたけど……………」

ウチが言つと、光はさつとウチらに背中を向けた。

「どーせやったら菜ノ花も一緒に帰ろうや！オレ呼んでくるから！」

「えっ！光!？」

光はもう部室に向かつて足を踏み出そうとしてる。

「…わかった。待ってるわ」

こいつ、ほんま最近やたらと菜ノ花に執着してるよな……

もしかして菜ノ花のこと好きなんか？

何の気なしにそう考えながら光の背中を見ると、ふいに部室に向かおうとする光を悠人が止めた。

「光」

光は面倒くさそうに振り返る。

「オレ部室にシューズ忘れたから、オレがついでに呼んでくるわ」

「えっ…！そうなん!？でも、オレも……」

「恵美が1人になるやる？お前はまっつけ」

トキ……

心臓が少し強くなった。

「あ…せやなあ……」

納得してとどまった光の代わりにさっぴていく悠人の後ろ姿をじっと見つめた。

ウチを、気遣ってくれたんや……

悠人はウチが光のことを好きやと思ってるから……

ズキッ

心臓が締め付けられるように痛くなる。

多分もう気付いてると思うけど、ウチは悠人にずっと片思いしてる。

だから、ほんまに悠人だけにはウチが他の人が好きやなんて勘違いして欲しくなかった。

…分かってる。

菜ノ花に悪気はない。

もちろん、悠人にも。

けど『光を思っている』ウチのための悠人の気遣いが、ウチにとってはとても辛い仕打ちのように思えた。

3話 勘違い 恵美side (後書き)

前半…というか今回はほぼどうでもいい日常ですね^| ^| ;

でも書いてて楽しかったです

ちなみにハゲとチャラ男は部員の代表としてこれからもちよいちよいでてくると思います(笑)

プロローグ 悠人side

あいつがいなくなった日。

オレは誓った。

あいつ以外絶対誰も好きにならない、と。

オレは和泉悠人。

この高校のサッカー部のキャプテンをしている。

ちなみに、まだ一年であるオレがなぜキャプテンなんかをしているのかということ…

理由は単純。

この高校はかなり珍しいことにもともとサッカー部がなく、部ができたのがオレらの年だったからだ。

サッカー部の誕生にはるくに情報も調べずに入ったオレと光がサッカー部がないことをしり、いろいろと努力したすえにできたというエピソードもあるのだが、それはあえておいておく。

顧問の先生はサッカーの経験がない先生にほぼ無理やりになってもらったので練習試合などを組んでくれるが、練習はほとんど放置状態というところだ。

そんなわけで練習メニューに関しては部員の中で唯一のサッカー経験者だったオレと光に任せられた。が、光はかなりの適当なやつだからへたしたら「毎日試合！」だとかいいだしかねない。

ので、オレは部のいろいろな責務を負わされて多忙な毎日だ。

まあ別に嫌なわけではないのだが。

今日もいつものように練習メニューを組んで部活に向かった。

いや、今日はいつもと違うようだ。

いつまでも部室にいる部員を呼びにいくと恵美のそばに見なれない女子がいた。

「んっ??」

肩までの髪のおとなしそうな女。

なんか見たことある気がするな……

少し考えて、ふとその子が昨日恵美と一緒にいた子だということ思い出した。

「そーいや、お前：昨日マネージャーになりたいとかなんとか言ってたやつやんなあ??」

「は、はい！一応先生にも報告してきました!!」

オレが尋ねると、その子はぴしつと姿勢を正して答えた。

……あれ???

たしか、昨日の子って眼鏡かけたいかにも暗そうって感じの子やっ
たやんな???

この子は眼鏡かけてないし、別に暗そうとも思えへんねんけど……

「……なんか昨日と雰囲気がつくくない??」

「あつ！せやろ！！やっぱ悠人は気付いてくれた!？」

オレが尋ねると、突然光が目をきらきらさせながらよってきた。

「これにはふかーいわけがあつてな!？聞きたい!？聞きたい!？」

「いや、ええわ」

なんとなくめんどくさそうな予感がしたので光を軽くスルし、オ
レは笑顔をつくってその子に軽い自己紹介をした。

「オレはキャプテンの和泉悠人や！よろしくな!！」

それからオレはその子にいろいろ教えるように言ってから練習に向
かった。

休憩時間、オレは恵美とさっきの女子が手をとめてぺちゃくちゃと
しゃべっているのを見つけた。

……またか。

ほんまに恵美だけはめんどくさいやつやなあ。

オレはふうと軽いため息をつき、注意をしようとして2人の方へ向かった。

「おい、え……」

「大丈夫ですよ！西崎さんと恵美ちゃんならすつごくおにあいです！私、応援してますから！」

偶然聞こえた会話に呼びかけようとした言葉を思わずきった。

あれ？

今恵美と光がお似合いやって言ったよな……???

んで応援してるって……

「いや、ほんまにちが「えっ！？」」

思わず驚きの声もれた。

それって、恵美が光のこと、好きってことか!?

「そつ…やったん……??」

恵美がゆっくりと振り返る。

「…悠人！！」

恵美は驚きと焦りの入り混じったような表情でオレを見た。

「いや、聞くつもりはなかったんだけどな…聞いてもーたわ」

恵美は慌てたように弁解をする。

「いや！違うねん！これは菜ノ花が勝手に！」

「いやいや、大丈夫。恥ずかしがらんでも、オレもおまえは光が好きなんちゃうかと思ってた」

…たしかに、こいつ小さいころから光としゃべってるときめっちゃ楽しそうやったもんなあ。

まあ恵美にそんな女の子らしい一面があるなんて思わへんかったからめっちゃびつくりしてもうたけど。

恵美はまだ弁解をしようとしているようだ。

必死に何かを言おうと口を開こうとする。

…こんなふう好きな人の話されて焦るみたいな女の子っぽい恵美とか初めてみたわ。

なんか、可愛いなあ。

オレはぼんつと恵美の頭に手をおいた。

「頑張れよっ!!」

恵美は少し頬を染めて口を閉じる。

そんな恵美が以外すぎてオレは思わず笑ってしまった。

「応援してるで!」

恵美は顔を真っ赤に染めながらうつむき、ぼそつと言った。

「……ありがとう」

下校時刻。

いつものようにオレと光と恵美はくだらない話をしながら家路に歩いていく。

そうしてもう校門をでようかというとき、

「……あれ??」

突然光が足を止めた。

そして慌てたように後ろを振り返る。

「菜ノ花は??菜ノ花はどこ行ったん??」

「え……なんか残って部室のそうじやるって言ってたけど……」

戸惑うように恵美が答えると、光はさっとオレ達に背を向けた。

「どーせやったら菜ノ花も一緒に帰ろうや！オレ呼んでくるから！」

「えっ！光!？」

恵美は光を呼びとめようとしたが光はもう足を踏み出そうとしていく。

オレは横目で恵美の様子を伺った。

「…わかった。待ってるわ」

恵美は諦めたのか笑ってそう言った。

そして光の背中をじっと見つめている。

さっきの話を聞いたばかりなので、なんとなく恵美が何を考えているのか予想できてしまった。

…たく、ほんまこいつだけはめんどくさいやつやなあ。

「光」

オレは光の方をつかんだ。

光が少しだるそうに振り返る。

「オレ部室にシューズ忘れたから、オレがついでに呼んでくるわ」

「えっ……！そうなん！？でも、オレも……」

「恵美が1人になるやる？お前はまっつけ」

「あ……せやなあ……」

光は恵美の方に視線をうつすと、少し残念そうに言った。

どや。

おまえのためにめんどくさいことしたったで。感謝せーよ？

去り際にオレはそう言わんばかりに恵美の方を見た。

しかし、恵美はオレには気付いていないようだ。

それどころか、光と2人でいられるチャンスだというのに恵美は少しもうれしそうな顔をしていなかった。

……???

なんでやる？せっかくのオレのがんばりを。

…ま、光が自分以外の女の子のこと気にしたあとやしあんなもんか。

オレはそう思い、部室の方へ向き直った。

部室の扉をあけると、目当ての女子はちょうど掃除を終えたようにちりとりと箒をなおしている最中だった。

「部室のそうじとは感心やなあ！」

オレが声をかけると彼女は振り返った。

「和泉くん??どうしたんですか??」

彼女は箒とちりとりを手早く片づけるとオレの方へかけよってきた。

「いや、光に呼んでこいって頼まれてな。一緒に帰らへんか？」

オレが尋ねると彼女は大きく目を見開き、うれしそうに笑った。

「いいんですか!?あ、あの!すぐに支度をします!」

「お、おう……」

オレは予想外の反応に驚きながらうなずいた。

あたふたと準備を始める新しいマネージャーをじっとみつめる。

そーいや、光ってめっちゃあの子のこと気に入ってるみたいやなあ。

あんなに誰かに執着してる光もあんま見たことないわ……

恵美には悪いけど、光はもしかしたらあの子のこと気になってるんかもしらんな……

「あ、あの…」

「……んっ!？」

考えにふけっていると突然目の前に支度を終えた女の子が立っていた。

「えっと、準備終わりましたけど……」

「ああ、ごめん!んじやはよ行こか!光と恵美が待ってるし」

オレと彼女は一緒に部室をでた。

そして光と恵美が待っている校門前へと向かう。

そのときにふと思った。

…あ、そーいやオレこの子の名前知らんな。

自分だけ自己紹介しての相手の名前聞かんとか…ほんま自分ぬけるわ……

「ごめん、聞くの忘れててんけど名前なんて言っん?」

オレは自分のバカさ加減にあきれながら彼女に尋ねた。

「あ、笹川菜ノ花といいます」

「ああ、じゃあ菜ノ花。よろしくな」

オレが言つと菜ノ花は少し困つたように言つた。

「あの…大阪では異性の下の名前を普通に呼び捨てで呼ぶっていうのが普通なんですか??」

「え…どうやら…今まで気にしたことなかつてんけど…」

別に大阪全域でそうつてわけじゃないやろしなあ……

ちゅーか、ウチの学校でも呼ばんやつはおるやろつし……

「別にそんなことないんちゃう??でもなんで……」

尋ねようとしてはつと気がついた。

オレが当然のように下の名前で呼んだんが嫌やつたんか!?

「ごめん!嫌やつた!?嫌なんやつたら名字で呼ぶで!」

オレが慌てて謝ると菜ノ花は驚いたように手を横にふつた。

「いえ!そんなことないです!ただ西崎くんもそうだったし、私は誰かに、ましてや男の子にそんなふうには呼ばれ慣れていないので緊張してしまうというか……」

ああ、そーいうことか。

めっちゃ焦つてもーたやん……

てゆーか、東京ではそんなんじゃないんかなあ???

別に東京も大阪も変わらへんと思うねんけどなあ……

「でも……うれしいです。」

菜ノ花がぼそりといった。

少し考えにふけていたオレは菜ノ花の方を見た。

「なんだか……いいですよ。下の名前で呼んでもらえるのって」

菜ノ花もオレの方を見た。

無邪気な笑顔。

ふと、記憶の中のあいつがよみがえった気がした。

「そうか？ならええけど」

オレもふっと笑った。

光が菜ノ花を気に入っている理由が分かった気がした。

そうか……

この子はちょっと似てるんや。

大好きやった、あいつに。

プロローグ 悠人side (後書き)

もはやプロローグではないプロローグ……
一応3話の話に対応しています (*^|^*)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607z/>

キミは太陽

2012年1月4日01時51分発行